海峡の街に新風　大型クルーズ船が続々寄港

「汽笛（フネ）とならんであるく、早春の白波」。漂泊の俳人、種田山頭火は昭和9年、下関に向けて早朝の海峡沿いをゆきながら『其中日記』に一句残した。行こつ流転の旅の途次、山頭火の心をとらえた関門海峡。旅情をそそる汽笛や白波は今も変わらぬが、周囲の風景は変貌を遂げた。下関市立水族館「海響館」、唐戸市場、シーサイドモール「カモンワーフ」、海峡ゆめタワーなどの施設が建ち並び、下関きっての観光スポットとなった。

今、この海峡の街に新しい風が吹いている。クルーズ船の寄港という追い風だ。下関港への昨年の寄港は57回にわたり、前年の3倍以上に急増。外国船社クルーズ船の上陸客数は10万人を突破し、前年の10倍の伸びを見せた。沖合人工島「長州出島」の岸壁延伸工事が進み、世界最大級の22万トンクラスの客船の寄港が可能になった上、クルーズ船受け入れが飽和状態に近い福岡・博多港から下関港に流れていることも背景にある。

とりわけ目立つのが中国からのクルーズ客だ。これまでは下関に寄港しても素通りし、福岡市周辺の免税店に直行するのがお決まりのパターンだったが、昨年あたりから変化が見られるようになったという。下関のお隣、北九州市（福岡県）に大型の免税店ができて福岡まで足を延ばす必要が薄れ、関門地域を周遊する時間が生まれた。実際に唐戸市場で新鮮な寿司を味わったり、海峡沿いの赤間神宮を訪れたりと、短時間ながらも下関観光を楽しむ姿は確実に増えている。免税対応や中国人向けのモバイル決済などを行う店舗が出始めているのも当然のなりゆきだろう。

中国では海外個人旅行が広まりつつあり、クルーズ客も今後、「自分で観光目的に応じた上陸後の観光行動を決め、自由に動き、観光地だけでなく街中で買い物するようなケースが増えてくるだろう」（山口経済研究所）と、地元の期待は高まる。

波の奏でる心安らぐ調べ。遠く行き交う船。その景色に溶け込む外国人客。関門海峡の今を、山頭火なら何と詠むだろうか。

山口新聞社　編集委員　久岡照代

写真上：下関港に初寄港した東アジア最大のクルーズ船「クァンタム・オブ・ザ・シーズ」（今年4月）
写真左：下関港に降り立った中国人クルーズ客